— 学術講演 —

強　さ　と　弱　さ

阿　部　志　郎

倉田学部長挨拶

大学の使命としてやはり一番大事なことは，アカデミックなレベルを維持し，かつこれを推進していくことだと思っております。そこで社会学部ではここ数年来，年に数回の学術講演会をもち，全国的に優れた理論家や実践家をお呼びするという慣行を続けております。今年度も数回の学術講演会を準備いたしております。今日は，そのいわば第一弾といたしまして横須賀の社会館で館長として実践をなさっておられ，かつ明治学院でも教鞭をとっておられます阿部先生をお迎えいたしましてお話を承りたいと思います。先生は福祉理論について非常にたくさんの著作がございますが，その他にキリスト教，あるいは社会思想といったような面でも業績がございます。さらに先程申しましたように横須賀におきまして社会館の館長として日々実践をなさっておられます。ここに比較的最近お書きになられた『地域の福祉を築く人々』という一冊の書物を持って参りました。私も読ませて頂きましたけれども大変立派なお働きをなさっていることがよくわかります。このような意味で理論と実践の両方において大変優れた先生をお迎えいたしましてお話を聞くことが出来ますことを大変うれしく思っている次第です。先生のもっと詳しい御紹介に関しましては，武田先生にひとつお願いをいたしたいと思います。

武田教授による講師紹介

学部長から御紹介頂きましたけれども，阿部先生は現在横須賀のキリスト教社会館の館長をしていらっしゃいまして，この社会館というのは，古い言葉でセーツルメントと言ったらいいんでしょうか。地域の方々のいろんな活動をやっている施設でございます。そのことについては先生からいろいろお話があるだろうと思います。

阿部先生は，一橋大学を御卒業なられた後，アメリカのユニオン神学校とコロンビア大学で，神学の社会福祉を御専功になり，それから明治学院大学で専任講師，助教授とずっと教鞭をとってらっしゃって，研究生活をやってらっしゃいましたけれども，それをどうやって実践の分野で活用するかというようなことでもって横須賀のキリスト教社会館へいらっしゃったわけでございます。教職を退かれてそして今フルタイムでもってそういう風なお仕事をし，理論と実践ということの結びつきを，文字通りやってらっしゃる方でございます。非常に啓蒙的な，子細に富んだお話をしていただけるんじゃないかと思って期待しております。では阿部先生を御招介いたします。

講　　演

皆さん，こんにちわ。阿部でございます。戦争が終わりました後昭和二十二年に，大型台風が襲って来ました。台風というと私共関東におりますと沖縄九州，四国に上陸をするものだと思っているのに珍しくその時開東地方を襲いました。昔は台風に女性名詞がついてまして，当時それをキャザリン台風と申しました。神奈川，東京，埼玉，群馬，茨木，栃木地方が軒並に被害にあいましたが，一番大きな被

害にあったのが東京でした。隅田川が決壊して，東京の下町が冠水しました。その時私は大学生でした。当時から，こういう時には直ぐ飛び出して行くタイプの学生でありました。いくつかの大学の学生達が集まって救援活動をしようということになり，それぞれで役割を分担し，当時物のない時ですが教授の家をまわって罐詰などを出してもらい，小学校からテントを貸りて２３名の学生が東京の下町の現地に参りました。冠水して３日目でした。わずか３日の間に皆が話し合いをし，必要な品物を動員して現地に行ったのですから，若さも加わり私共には気負いがありました。きっと感激して私達の救援活動を受け入れてくれるだろうとの期待もございました。もう水はほとんどひいて泥沼の中でございました。大きなテント張りの救援本部があり，そこに行って申し込みをしました。５，６人の町内会長たちがそこに座っておりました。私共が申し込みをしたところが，まことに冷たい反応でした。「今ごろ何をしに来たのか」という受け止め方で，私共は大変意外で内心ガックリしました。

その中の一人の町内会長が，「まあ，いいからおすわりなさい」と言って，筵の上に私共の腰をおろさせていろいろ話をしてくれました。その中でこういう話をしてくれました。当時隅田川の橋の下，東京の浅草の雷門の橋の下にバタヤさん（廃品業者）の仮小屋の集落がありました。それが水で全部一晩で流されてしまいました。バタヤさんと一緒にゼノさんというカトリックの修道士が，というよりもゼノさんを中心にバタヤさんたちが共同の生活をしておりました。このゼノさんが，物がない時でも金さえ出せばなんでもあったところ，つまり闇市へ行ってローソクとマッチの買い占めをしました。一艘のボートを貸りてその晩一軒一軒の家をまわりました。ひどいところは２メートルも冠水をしており，まだ今日のような避難態勢がありませんので二階屋に皆が避難をしておりました。食べるものはなし，もちろん電気は停電しておりまっ暗であります。いつ水が増水してくるかわからない不安に苛まれていたに違いありません。そこにゼノさんが１本のローソクをくばって，頑張って下さいと一軒一軒を訪ねたといいます。その町内会長が，ゼノさんに私達はどれだけ力づけられたかわかりませんというのです。この方は，賢明な方で，それ以上は言われませんでしたが，「それなのに貴方たちは今頃来て何をしようというのか」と，言おうとなさったんだろうと感じて頭を叩きのめされるような想いをいたしました。

ゼノさんは，この間ローマ法王がみえました時に特別に謁見を許されたポーランドからみえた修道士で，今は寝たきり老人で入院をしておられますが，大変立派な方であります。

ゼノさんは，浅草だけではなくて全国何カ所かでバタヤさんを集めて仮小屋を作って歩いた方です。ある土地に行ってバタヤさんを集めて仮小屋を建てる，そして役所に行って水道をひいてくれと申し込みをします。電力会社に行って電気をつけてくれと頼む。ところが役所では，とんでもない。貴方が小屋を建てた所は不法占拠ではないか，水をひくところではない，すぐに立ち退いてくれと言って役所から求められました。ゼノさんは，「あの人たちほっておけば明日死にます。あの人たちはネズミではありません。貴方それでよろしいか。」と役所に迫りました。ゼノさんの行く所，仮小屋が建ち，水道がひけ，電気がついたそうであります。

ゼノさんは，「人間は規則では救われません。」とよく言われました。私は福祉の仕事をしながら時々ゼノさんの言葉を思いおこします。忠臣蔵に，『花見の茶屋』という場面があります。大石内蔵助が酒に酔っぱらって茶屋遊びをした後，市井の人から足蹴りにされた食べ物を四つん這いになって食べてみせる場面であります。内蔵助はもはや心を失って敵討ちをする意志を放棄したことを表わそうとした大事な場面であります。四つん這いになって人が足蹴りにした食べ物を食べることは，私達人間がどんなにひもじくてもしたくはないという気持ちがあります。“武士は食わねどたかようじ”という一面を私共はもっており，人から投げ与えられたものは

ほしくない。勿論，私達はパンなくして生活することは出来ません。しかし，パンがどのような形でも与えられればいいというものではないと思います。私達の求めるのは人間の権利として獲得出来るパンであります。内蔵助が足蹴りにされた食べ物を食べるのは，人間失格を示しているわけであります。私達はパンなくして生活することは出来ません。パンは私達にとって不可欠な，そして人間にとって基本的な欲求であります。しかし同時に人間には，パンだけで生きるのではないという一面もあるかと思います。パン以上のものを求めながら自分の人生を歩ゆんでまいります。人間という言葉は，これはアンスローポスから出ているようであります。アンスローポスの意味は，「上を仰ぐ者」です。

人間は動物のように下を向いて餌を探してさまよい歩く存在ではありません。人間はパンを手段としながら，絶えず上を仰ぎ求める存在かと思います。“人はパンなくして生きることは出来ない”という真理と“パンのみで生きるのではない”という真理とが交錯する地点に福祉が成立をするのではないでしょうか。パンのみで生きるのではない。しかし，パンなくして生きることは出来ない。その二つの緊張関係の上に，私は福祉が成り立たなければならないと考えております。

戦争が終ってほぼ１０年間，国民は窺乏の生活を強いられました。食べるものも，着る着物もなく，また住む家もありませんでした。この時代の福祉は生活保護法，児童福祉法，あるいは身体障害者福祉法が昭和２０年代の前半にすでに出来ますけれども，この時代の福祉は食べる，食べさせるという関係にあったと思います。占領が終って日本が独立の道を歩み始めた時にも福祉で一番大きな課題は，ボーダーライン階層の問題であり，生活保護のボーダーに生活する要保護の人々が国民の１０分の１，１０人に１人は食べるか食べられないかという人々をどうしたらよいかという問題でした。昭和３０年代にはいって日本の経済がだんだん上昇をはじめ，３０年代の後半から高度経済成長の時代をむかえてまいります。日本がはじめてアメリカに車を輸出しましたのが，昭和３３年でした。３０台の車をアメリカに輸出したのです。当時アメリカのハイウェーは（今は５５マイルにおさえられていますが）130㎞／h位のスピードで車が走っておりました。ハイウェーの車の速い流れに日本から輸出した車は，ダッシュ力がありませんので乗ることが出来なかったのです。仮にハイウェーの流れのりましても，すぐに故障しましたから非常に評判が悪かった。それが今日200万台近い車をアメリカに輸出して，アメリカの産業を脅かし，日米間の政治問題化してきました。この変化がわずか２０年余です。わずか２０年余の間に日本の経済がどん底から這い上がり，今やアメリカの産業を脅かす所まできたわけでございます。この経済の成長があまりにも急でしたから，そこには幾つかの無理が生じました。福祉の立場から，時間の関係で二つのことを指摘したいと思います。

一つは，昭和３０年代の経済が成長する過程で経済を裏付けにして福祉もまた充実をしてきました。身体障害者福祉法，老人福祉法，母子福祉法は，昭和３０年代の後半に出来たものです。昭和２０年代の前半に出来ました三つの法律と３０年代後半に出来たもう三つの法律を足して福祉六法と呼びます。福祉六法時代が今日まで続いているわけでございます。言い換えれば，昭和３０年代に日本の社会福祉事業の体系化が出来たと言っていいのかと思います。これは経済が充実をしてきたから福祉もまた拡大をすることが出来たのでしょう。これを支えたのがパイの論理でありました。パイは，アップルパイです。福祉も教育もパイの分け前にあずかるという考え方です。福祉の分配を多くしてほしいと思えばパイの総量を増やさなければいけない。パイが大きくなれば福祉の分け前もまた増える，必要なのはパイを大きくすることだという経済第一主義です。福祉はそのおこぼれを頂載するというのがこの時代の論理でありました。経済がよくなれば福祉も豊かになり，経済が悪くなれば福祉の取り分も減る。このパイの論理が，今日なお私達の社会を支配していると言っ

ていいのではないでしょうか。臨調，行政改革と，福祉をきりつめようとしています。これは日本だけではなく，アメリカも英国もそうですし，北欧も同じ問題に直面しております。お金がなくなれば福祉を削るというパイの論理に対抗すべき論理を私達は持っていない。ここが今日の福祉の問題だと思います。経済と福祉をいかなる関係においてとらえるべきなのか。この論理をこれから是非構築をしてもらわなければならないのでありまして，私は若い諸君にそれを期待したい気持ちでいっぱいであります。

もう一つの問題は人間観です。日本の社会は明治の初めから目標を持っていました。それはヨーロッパでありまして，いつもヨーロッパを見，ヨーロッパに学び，ヨーロッパを模倣してまいりました。ヨーロッパを念頭に絶えずおいてまいりましたので，ヨーロッパに追いつけが目標となりました。これを政策化したのが，富国強兵殖産興業です。まず産業をおこし，国を富ませる。この富んだ国を強兵ということは，強い兵隊，軍隊で守る思想であります。戦争前，日本の社会に人間の価値を決める基準がありました。その一つは兵役の検査でありました。男は２０才になりますと兵隊になる為の徴兵検査を受ける義務がございました。甲，乙，丙のランクに分けられます。甲種合格，乙，丙不合格。私の時代は戦争の末期で兵隊が足りませんので乙も全部合格になりました。兵隊にとられれば戦争に行って死ぬことはわかっておりますから誰しも内心行きたくない。そこで兵役をなんとか逃れようと昔は一週間続けて醤油を飲んだとか，指を切って障害者になるようなことをしたようであります。丙種だと兵役の義務はなくなりますが，社会は仕事も与えてくれませんでした。ということは，兵役に行ける人間は一人前，しかし兵隊に行けない者は人間的に不合格というレッテルをはられたのです。戦前の人間の価値の基準はお国の役に立つか，立たないかでありました。戦争が終わって強兵の目標はなくなりましたが，国を富ませる目標は生き続け，これが経済成長に結び付いてきます。経済が成長するのに必要なのは工業化でありました。工業が盛んになると労働者が集まってまいりますから都市化されてまいります。特に阪神工業地帯のような大工業地帯では労働者が大量に必要でありました。労働者は誰でもいいというわけにはまいりませんので，三つの条件がありました。第一は，若くて，力があって長もちする人間です。第二に，教育があって知能を伴う。私は，戦争中に工場の旋盤工として働いたことがありますが，不勉強にして青写真が読めませんでした。しかし今工場で働いている人は皆な青写真を読むことが出来ます。こういう国は，アジア，アフリカでは日本ぐらいなものではないでしょうか。そこまで日本の教育程度が高まってまいりました。第三に低賃金。これらの条件にあてはまったのが若年労働者です。若年といっても，ここにいる人はもう若年とは呼びませんね。ここにいる人はもう蓋がたってまして…… もっと若い中学を出たばかりの少年少女を指しました。ところが工業地帯では都市化が急激に進み，高校進学率が高まりました。高度経済成長期になりますと，この地方では高校進学率は７０％を越えてまいります。みんな高校に進学してしまって工場に働きに出る中卒がいない状態でしたので，阪神工業地帯ではやむを得ず四国，九州に人を求め集団就職という形で投入をしてきたのです。この時，一人の中学の新卒に求人が平均２０件ありました。いまからみれば夢のような話ですが，就職先はよりどりみどりの時代でありました。そこで中学を出たばかりの少年少女のことをその頃“金の卵”“月の石”“ダイヤモンド”と呼び貴重品扱いをし，大事にいたしました。

この時とり残される子供がおりました。これが障害児です。障害を持った子供は，仕事がないだけでなく，義務教育が世界一普及している日本の国において，教育課程からつき放されました。障害をもっている子供は学齢に達すると就学免除，就学猶予の判子を押され学校にはいることが出来なかったのです。このことに対する反省がようやく起って，一昨年の春，養護学校の義務化に踏み切りました。ここにまいりますのに戦後３４年の長い年を必要とした

ことを忘れてはなりません。障害児が教育を受けることが出来なかったのは，生産性をもっていないのが大きな理由であります。働く能力がない。働けるか働けないかによって人間を区別いたしました。戦争前はお国の役に立っか立たないかが人間の基準であったといたしますと，戦後は経済の役に立つか立たないかで人間が分類されました。福祉も教育も，戦後，経済に奉仕をさせられてきたというのが，私達が今日もっております反省であります。こうした人間観，スクラップ・アンド・ビンドと申しますか，役に立つ人間は大事にするが，しかし役に立たない人間はスクラップにしていく。この社会哲学が今日の日本の社会を支えている人間観であります。

この上に，さらに日本の家族制度，家の重圧が特に障害者にはかかりました。明治5年のことですが，明治政府になって初めての国賓が日本にやってまいりました。ロシアのアレクセー皇太子です。皇太子が上陸をする前の日に東京で浮浪者狩りをいたしました。二百数十名の浮浪者をかり込んで強制的に隔離収容いたしました。この隔離した所が，今日の東京養育院という東京都切っての名門社会福祉施設であります。狩り込んだ理由は，“帝都の恥”だからと申しました。帝都は，帝国の都，東京のことを指しました。都の恥をお客様におみせするわけにはいかない。恥は隠せ。臭いものに蓋をするところとして社会福祉施設が出きました。社会が自分自身を防衛する為に，恥になる人を隔離する。これが施設の生い立ちの一面であります。福祉の対象になることは，家の恥，社会の恥，国の恥でありました。家ではその恥を出来るだけ隠そうとします。恥を出すことを戸籍の汚れと申しました。この汚れをなんとかして拭わなければならない。その一番いい方法は，籍を抜くことですので，除籍します。今日，日本に約9.500名のハンセン病患者の方々が療養しておられます。今は癩病，ハンセン病は治ります。しかしこの人々のなかで今でも偽名を使っている人が少なくありません。すでに籍を抜かれているか，籍はあっても家族に迷惑がかかることを心配するからです。籍を抜かれると，どこの生まれでだれの子供か全くわからなくなります。血の流れを失うからです。血の流れを失った人のことを“どこの馬の骨かわからない”と人間扱いしませんでした。

今日の生活保護法の前身は，昭和4年に出来た救護法です。明治の時代に出来ました恤救規則がほぼ50年続きました後に，救護法が成立しました。この法律は日本の社会福祉立法の中ではただ一つボランタリアクションによって生まれた産物でありまして，当時の方面委員，今日の民生委員が運動してつくった法律なのです。当時不景気の時代で政府に金がなく実施は昭和7年までのばされました。政府はやむを得ず競馬の益金をこれにあてました。福祉とギャンブルとの関係は戦後でなくて実はこの時代にさかのぼることができます。救護法は社会福祉立法の歴史において比較的近代的な法律といわれてまいりました。が，救護法の対象になりますと，選挙の欠格条項の適用を受けました。今の言葉で申しますと公民権の停止です。今日は，生活保護は国民の権利でありますが，救護法の時代は保護を受けることによって権利が剝奪されるということがおこりました。それは福祉の対象は社会の恥だからであります。

恥の観念は，因果関係がもたらしたものかと思われます。因果とは，良い原因があれば良い結果が生まれ，悪い結果は悪い原因から出てくるということです。福祉の対象を悪果ととらえるのです。そしてそれは不浄と考えられました。不浄とは穢れですが仏教では，同時に許されないことという意味があります。家から不浄の者を出すことは許されませんでした。障害者はこの対象と考えられたのであります。盲や聾のいる道は不吉であると『古事記』に書いてあります。盲に出会うことは，実に強い言葉だと思いますが，不吉であると嫌われてまいりました。血の流れを汚す存在として障害者が位置付けられたのです。ここに日本の障害者の問題があるのではないでしょうか。いわば血の流れが，長男から長男へと縦に引き継かれてまいりました家の中で障害者は排除されてきたのです。血の流れの穢れとしてとらえ

られてきた障害者が，富国強兵のスローガンの下で生産性を持たない者という問題が加重されまして日本における障害者問題をつくってきたと言えるかと思います。障害者の問題がおこってきたのは昭和30年代の終りから４０年代にかけてです。

４０年代には，老人問題が出てまいります。そして老人問題がいつの間にか高齢化社会に発展をしてまいりました。高齢化社会は６５歳以上の老齢人口が７％以上に達した社会を国連の定義によって決めてるのですが，それは日本にとって１９７０年，昭和４５年のことでありました。昭和４５年に日本の老齢人口が７％に達し，以降今日まで増加の一途の道をたどっております。老齢人口の増え方は非常に早いようであります。大まかに言ってスウェーデンの３倍，フランスの４倍位のスピードで増えてまいります。ヨーロッパが在来の東海道に乗っておりますのを，私共が新幹線をしたてて追いかけているようなもので，今から約２０年後に追い着きます。それから先は日本の方が先に進みヨーロッパはそこで停滞を始めます。諸君が老人になるころ，老齢人口は少なくても２０％になっており，大変な問題に逢着しているかと思います。老人の問題は，老人福祉施設に老人を入れることによって解決をはかってきたのです。戦後の日本の社会福祉の解決には二つの柱がありました。一つは生活保護であり，もう一つは社会福祉施設でした。ところが老齢人口が増大し，この二つの柱では解決が出来なくなってまいりました。施設がまず足りません。特別養護老人ホームを考えますと，過去１０年間に6.8倍に増加しております。大変な増えようですが，それでも老齢人口で申しますと収容率は1.5％にまだ達していないのです。ということは１００人の老人の中で老人ホームにはいれるのはわずか１人。９９人ははいれない。ところが問題はこの大多数の老人の中におこってまいりました。施設を倍増したところで２人か３人に対応するにすぎない。この残りの老人達が生活をしている所が地域でありますから，地域で老人の問題を住民がみんな一緒に考え，悩み，解決の道を共に探そうではないか。さらに今まで地域から隔離してきたその施設も地域の中に位置付けて施設にはいっている１人の老人プラス９９人，１００人全体の問題を地域を基盤にして考え直そう。これが地域福祉の発想であります。それには今までのように老人を施設で受け入れるだけという方法ではもはやまにあわない。施設や機関の方からリーチアウトして地域に近づこう。これを〝アクセスビリティーの原則〟と申します。専門家が地域に接近し，ホームヘルパーとか訪問看護婦のように地域の老人のところに出向いて，出前をすることが在宅福祉サービスとして，だんだんと台頭をしてまいりました。

地域福祉が今年の国際障害者年で言えば，ノーマライゼーションの理念と大変近いのです。今まで町で障害者がみえませんでした。障害者が出歩るけるような町の環境になっていないからです。歩道橋があり，車椅子では駅の改札口が通れない。そこで障害者は施設か家の中に閉じ込められてまいりました。この障害者を町でみえる存在にしょう。それには障害者が町で生活できる生活の条件，社会的環境をつくり，その上で障害を持つ者も持たない者も共に社会参加しょうというのがノーマラゼーションの理念です。障害者が町で一緒に生活することこそ，ノーマルという考え方に切り換えようというのであります。理念としては，大変簡単で明白ですが，それを実際の場面にうつすことがいかに困難であるかをお互いによく知っております。都市化されていく状況の中で私達は社会の問題に対して，無関心，無責任になり，そして自分の城の中に閉じこもってまいります。団地住いをしている私の友人の語です。朝，出勤するのに玄関で靴をはいてカバンを持って立ちます。このまましばらく立っている。階段に足音が聞こえる間はじっと待つ。廊下の足音が聞こえなくなってシーンとしたらドアを開けてサッと出ていくと語りました。これが現代人の心理ではないでしょうか。団地の建て物，廊下，階段，水道，電気，ガス，ゴミの処理施設すべて共用です。私達の今の生活は次第に共同化され，社会化されてまいりました。

これからの社会のしくみは増々共同化されてまいす。共同化される社会は私達に共同の心を求めます。それなのに私達は，隣の人と会って挨拶するのがおっくうなのです。出来れば人に会わずに裏口からそーっと出ていきたいところにいるんですね。いわば私達の意識は個別化されてまいりました。てんでバラバラの方向をみているのです。共同化されていく社会のしくみと個別化されていく私達の意識との間に大きなギャップが生じ，そこに様ざまの新しい問題が生じてきました。たとえば，老人の孤独。

高齢化社会の問題は老人もさることながら，子供の問題が非常に重要です。子供の数がだんだん減ってまいります。私が生まれた頃，子供は１００人の中で３６人おりました。小学校の同級生は７２人いました。１クラス７５名編成でしたから。それだけ子供の数も多かったんでしょう。今は１００人の中の２４人位です。お隣の韓国には100人の中の４２名，反対側のフィリピンには４４名いるのです。しかし私たちは２４名を割ろうとしています。子供の数が減ってきたのは，１人の婦人が生涯の中で産み育てる子供の数が減ってきたからです。以前は１人の女子が５人位の子供を生み育てました。今は1.74特に高学歴の夫婦の場合にはどうやら1.５８に今おちているようです。この数が横這いになるのか，増えるのか，減るのか，議論の分れているところですが，おそらくもっと減っていくだろうと考えずにはおれません。子供の数が減るという量的な問題もさることながら，質的な問題が深刻になってまいりました。国際児童年にアメリカで新しい問題が提起されました。アメリカの若い世代に子供は不必要であるとの考え方が瀰漫しつつあるという報告であります。昔は子供を産むことが結婚の条件であったのに，今は子供を産まないことが結婚の条件に変わってきた。そこで同棲形態が増えているのは，一つの現象にすぎません。こうした状況の中で，子供の持つ質的な問題が深刻になってきました。„暴力教師„という映画がアメリカに出たのが２５年前です。現在，ロサンジェルスの町一つで，日本の校内暴力の２倍の数字を数えるほど日常化されてまいりました。“校内暴力”だけは日本に来ないだろうと言われましたし，私もそう思っておりました。ところが豈図らんや今私達は校内暴力の問題でどうすることも出来ない悩みを持っております。家庭内暴力，自閉，非行，シンナー，暴走族，家出，登校拒否，さらに子供の自殺が増えています。東南アジア，アフリカ南米の開発途上国には子供の自殺がありません。開発途上国では食べるパンがなく，世界で平均１日１万人餓死してまいります。その食べる物を得ることに格闘しております。自殺を考える余裕はないのかと思います。それだけ生命力もみなぎっているようです。私達の子供達はパンに満ちあふれていながら，心は増々貧しくなってきているのではないか。

私達が持っている今日の子供の問題は，文明，文化が高まった状態において現われてきたもので，文明が支払わねばならないコストなのかもしれません。文明，シビリゼイションという言葉のシビルはキビタスから出ます。キビタスとは街という意味です。文明は都市から生まれ，文明が都市をつくってまいりました。キビタスは同時に市民的コミュニティーの意味であります。言い換えれば，市民的コミュニティーが確立することによって，文明が初めて意味を持ち得るのではないか。市民的コミュニティーが成熟しない社会における文明では，私達が今日直面する苦悩をかかえざるを得ないということではなかろうか。今日私達は，パン以上の問題にぶつかっております。パンで解決することの出来ない問題が在宅福祉サービスとか，パーソナルソーシアルサービスといった新しい対応を必要としていると言えると思います。

今の日本の状況において，はたして市民的コミュニティーが出来るのか。参加・自治・分権が主張されているけれども，はたして市民の参加によって新しいコミュニティー作りが可能かどうかを私達は問われているのです。都市化され，匿名化されていく社会の中でコミュニティーを作ることはナンセンスだと言う批判もあります。確かに非常に難しい課題

だろうと私も覚悟しております。しかし，決して悲観的に考えてはおりません。私のおります神奈川県は，兵庫県と少し違うようです。二つ特色があります。一つは県民の平均年齢が若く，３１歳であります。若いということは，老人を他の県に追い払って若者で占領している形であります。もう一つの特色は他県生活経験者が多いことです。私も二つの県を経て神奈川県にまいりました。私のような人間が県民の７０％を占めております。つまり，神奈川県は若者の，よそ者の，流れ者で作っている県でありおよそ福祉に対する関心は薄いと思われる所であります。県が調査いたしました。県民に質問しました。「あなたのご近所に，寝たきりの御老人，手足の悪いお子さんがいるとします。あなたはどうなさいますか」。答えにはいろいろな幅はありますが，何かしてあげたいと答えた県民が９４％に達しました。もちろん，何かしましたとは答えませんし，何かしますとも約束してくれません。何かしたい。でも，何をしていいのかわからないというところでありましょう。蛸壺の中に閉じこもって，人のことには係わりをもたない。自分だけ生きるのに精一杯。自主的な行動にはうつさない。しかし，心の底には，寝たきりの老人，あるいは障害児に対する想いは隠されているのです。福祉への意志はあります。これが隠れた大きな福祉への資源であります。これを誰が掘り当て，どうやって掘り起こし，横につなげていくか，これが，これからの福祉の大きな課題になってまいります。

この巨大なエネルギーの発掘は出来るし，しなければならない。それによって福祉を高め新しい福祉社会を築くことが出来るだろうと楽観的に考えております。

今から５８年前の大正１２年の９月１日に，大震災が襲ってまいりました。関東大震災であります。１０万名の人々の命が失われ，３４０万名が罹災いたしました。小菅に大きな刑務所がありまして，そこに1.２９５名の累犯者と申しますと前科２犯以上の受刑者が，刑に服しておりました。震災が襲ってまいりましたのが午前１１時５８分４４秒です。食堂でいまや受刑者達が昼のカレーライスを食べかけようとした瞬間でありました。突然上下動の激しい地震が襲ってまいりましたので，慌てふためいて庭に逃げました。庭の大地にき裂が走りました。ふり向くと，今まで座っていたレンガ建ての食堂の建て物が目の前でガラガラガラとくずれ落ちました。刑務所をとり囲んでいた５メートルのレンガ塀が倒壊しました。“野戦における散兵の如き状態を呈せり”と刑務所は記録しております。野原に兵隊が散らばって，だれがどこで何をしているのか全くわからない混乱した状態であります。受刑者にとっては，逃亡する絶好のチャンスです。関東地方の刑務所で多くの受刑者が逃亡し，今もって行くえ不明ということになっております。受刑者達がその時お互いに言葉をかけ合いました。「有馬の顔をつぶすな！」。有馬とは有馬四郎助という，「有馬の先に有馬なく有馬の後に有馬なし」と今日でも法務省で伝えられているクリスチャンの名刑務所長でありました。有馬に迷惑をかけるなというのです。逃げないどころか自分達で自警団を組織して，こん棒などを探してその晩一晩中刑務所のぐるりをとりまいて警戒しました。「怪しい奴を刑務所の中に入れるな」っていうのです。ついに1,２９５名の受刑所は１人も逃亡しませんでした。震災を契機にして受刑者の心が一つにされ，一つのコミュニティーが作られたのであります。

私達はパンなくして生活することはできません。しかし，パンだけで生きるのではない。たった１本のローソクが私達の心に希望の火を燈してくれることがあります。このローソクの燈火を掲げることも福祉にとって大きな責任ではないのでしょうか。小菅の刑務所に出来たその美しいコミュニティーを，なぜ私達は作ることが出来ないのでしょうか。